



TITLE:

# Epistemological Analysis of the Scientific Realism Debate( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

Onishi, Yukinori

---

CITATION:

Onishi, Yukinori. Epistemological Analysis of the Scientific Realism Debate. 京都大学, 2015, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2015-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k18724>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（ 文学 ）	氏名	大西 勇喜謙
論文題目	Epistemological Analysis of the Scientific Realism Debate (科学的实在論論争の認識論的分析)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、科学的实在論論争に認識論的な観点の導入を提案し、実際にいくつかの認識論的立場に基づいた分析を行うことで、その有用性を示すことを目的とする。</p> <p>第1章では、1980年代以降の实在論論争の動向をまとめ、決定不全や説明の必要性等をめぐる实在論-反实在論間のすれ違いがちな論争状況について概観するとともに、いくつかの实在論的、反实在論的立場を紹介し、これを20世紀初めにおけるベンゼンの環状構造の確証実験の事例を用いて例示した。</p> <p>第2章では、新たなアプローチを導入する動機となる、实在論-反实在論間のすれ違い状況についてさらに詳しく分析し、その根深さを明らかにした。これをふまえ、認識的観点の導入を提案し、認識論に基づいた具体的な分析方法を提示するとともに、こうしたアプローチ（認識論的アプローチ）の利点について確認した。中でも主な利点として、これまでの实在論正当化で問題となっていた、「最善の説明への推論」と呼ばれる推論形式に訴えないような、新たな手法による实在論の正当化可能性を指摘した。</p> <p>第3章では、次章で行う認識論的観点からの分析の準備段階として、分析に使用する認識論的立場について紹介した。具体的には、調和主義、信頼性主義、追跡理論と近年におけるその改訂版、および関連する対抗仮説理論といった立場をとりあげた。</p> <p>第4章ではこれをふまえ、実際に上記の認識論立場から实在論論争の分析を行った。結果として、いずれの認識論的立場においても、科学者共同体で受け入れられているような仮説に関しては、ある種の選択的实在論がもっともふさわしいという結論を得た。一方で、こうした認識論的分析は単に实在論論争における既存の立場を追認するだけでなく、さらなる立場の候補や、これまでの想定とは異なる解決策の可能性を示唆していることを指摘した。</p> <p>第5章では、前章の分析結果をふまえ、Kyle Stanfordによって近年提出された、選択的实在論批判の議論を扱った。議論が前提とする歴史的事例を再確認した結果、選択的实在論がトリビアルな反駁を受けないためには、实在論的なコミットメントを行う際の条件として、さらなる制約が必要であることを指摘し、そのような修正を施した選択的实在論に対しては、Stanfordの議論はそれほど大きな脅威とはなっていないと結論づけた。</p> <p>以上の議論を通じ、認識論の实在論論争への適用可能性を示すとともに、ある種の選択的实在論の、認識論的観点からの擁護可能性を示した。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は科学哲学の大問題の一つである科学的实在論論争に、認識論という視点から新たな光を投げかけることを試みた論文である。科学的实在論とは、電子や原子やクォークなど、科学が指定する観察不可能な対象の存在について、われわれはどのような態度をとるべきか、という問題であり、おおむね科学者たちの言うとおりそうしたものの存在を受け入れるべきだという实在論の立場、受け入れる理由などないという反实在論の立場、選択的に受け入れるべきだという選択的实在論の立場など、さまざまな立場が提案されてきた。とりわけ、1980年代以降、この論争は論点が整理されて議論の高度化が進んでいる。

本論文は、この論争の決着がつかない理由の一つを、哲学者たちの認識論的な前提の違いにあると分析し、論争の舞台を認識論のレベルに移すこと、さらには英米系の認識論の最近の成果を实在論論争の分析に生かすことを提案する。英米系の認識論もまた、1980年代以降急速に議論の精緻化が進んできた領域である。こちらで大きな問題となってきたのはデカルトのデーモンに代表されるグローバルな懐疑主義にどう答えるかという問題であるが、この問題は科学的实在論における観察不可能な対象についての懐疑主義と似た構造を持つ。しかし、認識論は科学哲学とはまったく独立に進展してきたため、問題設定の類似性にもかかわらず相互に参照されることはこれまでほとんどなかった。問題設定のレベルで本論文は非常に独創的である。本論文のもととなる既発表論文の一つが科学哲学会の学会賞を受賞していることも、本論文の独創性を示す一つの指標となるだろう。

本論文で参照される認識論上の理論は、調和主義、信頼性主義、2種類の追跡理論、「関連する対抗仮説」理論である。これらの理論は認識論においてそれぞれ対立し、こちらでも論争が継続している。本論文は、これらの理論のそれぞれから、科学的实在論論争におけるそれぞれの立場の言い分を分析し、どの立場の言い分にもっとも分があるかを評価する。ただし、認識論的な理論の優越性が想定されているわけではなく、いわゆる反照的均衡、すなわち、認識論における諸理論と科学的实在論における諸立場とわれわれの直観との間の相互の照らし合わせが行われている。

認識論の理論から科学的实在論論争を評価すると言っても、両者の使う語彙や背景となる問題設定はかなり異なっている。本論文は、その間を丁寧にすりあわせ、二つの分野の間の通訳を行う。どれか一つの立場を優遇するわけではなく、非常に中立な観点からさまざまな立場を比較していく。その結果本論文が見いだすのは、選択的实在論はどの認識論的観点からも高く評価されるということであった。5つの認識論的理論から3つの实在論上の立場を評価するということは15の組み合わせの分析を一つの論文で行っているわけで、その作業の細やかさは大変なものである。

また、本論文は、科学の実例として、ベンゼン環の発見と、X線結晶構造解析を使ったその検証を取り上げ、科学的实在論論争のそれぞれの立場がこの事例についてどういう主張をするかということを具体的な検討の対象としている。これは、科学

哲学においてまだそれほど議論されていない事例であり、事例研究そのものも独創性が高い。

以上のように、問題設定、分析、事例研究のすべての面で高い独創性と精緻さを持つ本論文であるが、まったく不十分な点がないとはいえない。第一に、個々の分析はどうしても簡略なものにならざるをえず、別の解釈、別の視点からの評価などが十分に考慮されているとはいえない。第二に、哲学論文として気になるのは、著者自身の強い主張が打ち出されていないためにややもすると分析が無味乾燥なものになりがちだという点である。また、本論文で行われているのは認識論の諸理論を实在論論争に適用するという作業であるが、反照的均衡という方法論の趣旨からいえば、その適用した結果が今度は逆に認識論という分野の暗黙の前提や問題設定を明らかにする、というプロセスがほしいところである。本論文ではそこまでは手がおよんでいない。

しかしこれらの不満点は、本論文そのものの瑕疵というより、著者の今後の研究への期待という面の方が大きい。したがって、本論文そのものの価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2015年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。